

2025 年度 外部評価委員会 実施報告書

1. 外部評価委員会を終えて

「創価大学自己点検・評価実施規程」第 12 条第 3 項に基づき、本学の自己点検・評価活動の客観性、公平性を担保するため、外部評価を実施しました。

本学は 2020 年度より毎年、全学的な取り組みを対象とした外部評価を実施しており、外部評価委員を 2 年ごとに改選しています。本年度は第 3 期の 2 年目となります。

2025 年度の外部評価は、2024 年度の外部評価委員会においてご指摘を頂いた事項への対応状況を中心に、本学が 2024 年度に取り組んできた内容に関して外部評価委員からの講評を頂く方針としました。具体的には、教育・研究・SDGs・ダイバーシティ・経営基盤の構築、の 5 つの分野で報告内容を構成し、委員会では、鈴木学長から本学の取組みについて説明したのち、質疑応答を行い、活発な意見交換を行うことができました。後日、外部評価委員から提出された評価報告書では、本学の長所・特色、課題など多くの提言をいただき、改善・向上に向けた重要な視点を多く得ることができました。次頁より外部評価委員からの提言概要を紹介します。

世界各地では未だ紛争が続き、核使用の現実のリスクが高まるなど、残念ながら世界平和とはかけ離れた現状にあり、また、大規模な干ばつ、洪水、山火事など気候変動の影響も深刻な時代にあります。そのような状況にあって、本学は 2021 年に創立 60 周年へ向けて発表した中長期計画「Soka University Grand Design 2021-2030」が、本年度で 5 年目となり、いよいよ折り返し点を迎えます。外部評価委員からいただいた評価結果を活用し、「価値創造を実践する『世界市民』を育む大学」を目指して、ますます教育・研究改革に取り組んでいく所存です。

最後になりましたが、ご多忙の中、本学の外部評価委員をお務めいただいた委員の皆様、改めて感謝申し上げ、あいさつとさせていただきます。

2025 年 9 月
創価大学 副学長
全学自己点検・評価委員会 委員長
西浦 昭雄

2. 外部評価委員からの提言概要

(1) 教育

①長所・特色とされた事項

○内部質保証への学生参画

- ・ 学生を含めた内部質保証の取組に着手されている点、その中でも、学生から3つのポリシーの浸透について提案があるということは特筆すべき点である。その認識はまだ低いという認識の通り、全学生がDPを理解して大学生活を送るのが理想であることから、アカデミック・アドバイジングの観点も踏まえつつ、継続した取り組みを期待したい。
- ・ 「学生第一」の学生支援は実現されている。今後も学生参画による内部質保証の推進、やDXを活用した学生支援をお願いしたい。
- ・ 学生中心の大学という理念のもとに、学生参画の内部品質保証や、教員と学生双方のポートフォリオを活用した振り返りの強化を進めており、教育と学びの質の向上が期待できる。
- ・ 学生参画による内部質保証の推進といった点も高く評価できる。

○多彩な教育プログラムと学生支援

- ・ SGUでA評価だったこと、あの難度の高い事業を10年も続けられたことに敬意を表します。THEやQSの結果もその成果とみることができ、この10年で培われてきた体制や教育プログラムを財産として、継続的な取り組みを期待します。
- ・ 授業を含む学生生活全体を通じた「価値創造プログラム」の体系化に着手したことは、学力だけでなく人間力を高める創価教育の訴求につながる可能性もあり今後の展開に注目したい。
- ・ グローバルやデータサイエンス、SDGsなどの取り組みに加え、地域と連携した学びやアントレプレナーシップ教育プログラム、DXを活用した学生支援と、その手厚さは他大学をしのぐものであろう。
- ・ 学生の成長について、学修成果の可視化により実感させるとともに、つまづきの予兆を早期に発見する工夫を行い、生活状況についてもアンケート調査により把握するなど、充実した学生生活となるようきめ細かな目配りをしていることを評価します。また、学生や大学による地域活動は、八王子市の活性化につながっており、深く感謝申し上げます。

②課題とされた事項

○教育成果の可視化と具体化

- ・ 積極的に教育改革に携わり、着実に成果につながっている様子が報告書全体に伺えるが、さらに質の向上を図るためにも、その結果は可視化することが重要である。非常に難しい課題ではあるが、今後は教育学習の成果に関して、エビデンスに基づいたご説明を心掛けていただきたい。特に、グローバル人材育成プログラムは貴学の大きな特徴でもあり、受講した学生がどのように育っているのかなど興味がある。他大学のモデルとなる可能性があるのでぜひお聞きしたい。

- ・ 各種ランキングにおいて上位項目があるが、この内容・中身が周知されていない。創価大学なら、〇〇の項目で上位にランクすることは当然・納得、させるような取り組みも必要。グローバル教育(SGU)も十分な取り組み、成果は出しているが、対外的にもうひとつ殻を破れていない気がしており、創価ならではの尖ったもので、創価大学=国際、グローバルな大学、を浸透させていく。
- ・ 学生自治会など学生団体も巻き込み、大学と学生が一体となった情報発信というような、さらに踏み込んだ施策を検討してほしい。少子化が進む中で、創価ブランドを熟知した層以外への高い教育力に関する認知度をどう高めていくのか。この点について早急に取り組まないと、縮小再生産のスパイラルに陥ってしまうのではないかと。非常に難しいことではあるが、もはや避けては通れない課題である。

教育の中身、それによって培われる就職力などをどうアピールしていけばいいのか。戦略的な取り組みが求められる。中でも、有名企業400社への就職率などは、就職氷河期世代の保護者には大いにアピールできる指標である。キャリア支援の一環として、そうした指標を意識することは、競合する大学との差別化につながり、ブランディングにも寄与するはずだ。戦略的なキャリア支援のあり方を考える上でも検討すべきものとする。

○地域・社会や高校と連携した開かれた大学づくり

- ・ 大学として「開かれる」ことが重要であるとする。国際化を重視していることはよく理解するところではあるが、八王子に立地する大学として、地域で学び、地域から学ぶことが重要である。その中で、大学が地域に貢献できるコンテンツとしてAI利用がある。AIをどう活用していくのか。八王子のAI人材育成に貴学が関わることで、WinWinの関係性を築くことも可能である。学生がもっと地域に出ていくために、コーディネーターのような第3の職種の活用も検討されたい。
- ・ 地域連携についてだが、地元八王子市とは深く連携しているが、幅(エリア)を広げることも必要ではないか。地域連携とは言い難いかもしれないが、〇〇県、〇〇市でしか出来ないこともあるので、新たな広がり、一面を見出せる可能性がある。
- ・ 高大接続について、18歳人口が減少する中、「選抜」から「接続」へと概念が転換している。附属校だけでなく、全国の高校の探究活動と総合型選抜をどう繋いでいくか、ぜひ検討いただきたい。

○AI時代の新たな大学教育の構築

- ・ AIは実体験ができないというデメリットがある。さまざまな国際ランキングの評価にも表れているように、だからこそ、グローバル、地域、高校と、様々な場所で越境するようなプログラムを展開する素養が貴学にはある。新しいAIの時代に、貴学が今後もさらに大きく羽ばたくような教育のあり方を期待する。
- ・ 生成AIやエージェントAIが急速に進展してくる中で、大学教育においてAIとどう向き合っていくかは今後の新たな課題になると考える。また、データサイエンス教育の拡充やDX活用による学生支援の強化等にもしっかりと成果を出されているが、テクノロジーの進展が非常に速いため今後はより一層の拡充が望まれる。

(2) 研究

①長所・特色とされた事項

○重点研究の推進

- ・ 重点研究の中でも特に糖鎖生命システム融合研究所が行っているグローバルに展開する研究を高く評価する。その成果を積極的に可視化する中で、特に一般人にもわかりやすい形での情報発信を望む。
- ・ 重点となる研究を定め力強く推進していることは、大学のガバナンスや組織力の表れでもあり、他大学の参考にもなる取り組みと思われる。また、海外にも拠点を開設されていることも注目に値する。今後も継続するとともに、重点分野以外の研究についても、おそらく多くの優良な研究があると思われるので、それらの発掘、発信にも意識を向けられるとよいだろう。
- ・ 世界が注目する、評価されている研究を創出、推進していることは大いに評価できる。
- ・ 「糖鎖生命システム融合研究所」「プランクトン研究所」「マレーシア研究拠点」などの取り組みは、社会課題の解決に資する研究であるだけに評価できよう。また、「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」を建学の精神に掲げる創価大学にとって、国際平和学研究科は、特筆すべき研究の拠点であろう。昨年も指摘をしたが、国際情勢がますます不安定さを増す時代にあって、国際色豊かな研究者がそろそろ研究科だけに、その存在を社会に知らしめるような研究や取り組みを期待したい。
- ・ 優れた研究成果は高度な教育につながるものであり高く評価すべきものと考えます。

②課題とされた事項

○研究内容の更なる発信

- ・ 世界が注目する、評価されている研究が周知、認知されていない。研究者・教員の外部への発信、他大学との交流、共同開発等の積極的な言動が必要では。
- ・ 重点研究分野での成果が国際的にも認められていることに関して、国内の関連機関や民間企業に対しても積極的なアピールと連携があれば、もっと知名度があがるのではないかと。海外大学との交流において、今後の関係性をより発展させていくためには、学生同士の交流だけでなく教員を含む研究分野での交流がより一層重要になると考える。
- ・ 改めてウェブサイトを確認してみたが、ニュースの更新はされているものの、活動などの項目の更新が後手に回っている印象を受けた。サイトの見やすさも含め、改善の余地はあるように感じる。
- ・ 研究に集中できるよう、産学連携等の事務負担から研究者を開放できる工夫も必要という考えには共感する一方で、人件費の問題が伴うものであり、一朝一夕には解決しない難しい課題であると感じました。

(3) SDGs

①長所・特色とされた事項

○ポスト SDGs を見据えた取り組みの着手

- ・ ポスト SDGs の取り組みを始められていることは特筆すべきことである。
- ・ 地域との連携も含め、さまざまな取り組みは高く評価できる。また、アフターSDGs を見据え、野心的で独自の取り組みを進めることができれば、大学のブランディングにも大きく寄与すると考える。学内では教職員と学生が一体となって取り組みつつ、その運動について、これまで以上に地域を巻き込んだ活動に広げることで、地域の中核大学としての存在意義を高めてほしい。
- ・ 2030 年以降のアフターSDGs も見据えた動きが始まっているなど、着実に取り組んでいると感じます。

○全学的な SDGs 施策の着実な推進

- ・ 全学 SDGs プロジェクトを、学生を巻き込みながら推進している。教育においても、地域におけるサービスラーニングが定着して生きているほか、SDGs 副専攻の本格化することになるので、今後期待したい。
- ・ 毎年、学内のカーボンニュートラルや地域および産学連携での社会実装等に取り組みられ、その積み重ねが文科省の支援事業に採択という形で評価されたことは非常に大きな成果と考える。社会課題解決起点での研究や取り組みは、創造的思考力を鍛えることにも繋がるため、まさにこれからの AI 時代に求められる力であり、本学のブランディング強化のためにも毎年のレベルアップと社会実装化に向けた案件創出に期待したい。
- ・ いち早く、積極的に、取り組んでおり評価出来る。カーボンニュートラル達成に向けた取り組みも推進し、継続して、各所と連携し、地球をより良い方向に導いて欲しい。新設される「グリーンテクノロジー学科」においても、地球規模の課題を解決する一助となる研究、学びを期待する。

(4) ダイバーシティ

①長所・特色とされた事項

○国際化推進への高い評価

- ・ 前述した通り、SGU で A 評価だったことは本当に素晴らしく、THE や QS の世界ランキングの結果もその成果だと思われる。
- ・ グローバル化を牽引し、キャンパス内も多種多様な人種・国々の学生が多く、グローバルキャンパスであることが実感できる。SGU 終了後も継続し、国際色豊かな大学であってほしい。
- ・ 外部の大学ランキングで本学が国際性分野で全国 8 位となったことは、これまでの SGU の取り組みが評価されたものとして非常に高く評価できる。報告書に記載のあった「学生の主体的な国際活動参加を促す取り組み」については、他大学が JICA との連携協定による学生派遣や研究協力を実施するなどの事例があり、本学の国際的なネットワークを活かした制度設計や仕組み化に期待したい。

○ダイバーシティ&インクルージョンの着実な進展

- ・ 今年度、鈴木美華教授が学長に就任し、事務職員の部長に女性が就任するなど男女共同参画の上からも高く評価できる。執行部への女性の大胆な登用は組織風土の改革にもつながるだけに今後も継続的に進めてほしい。
- ・ DEI の観点の中でも、特に留学生という多様性を大事にする貴学においては、その特徴をもっと前面に押し出して多様性ある教育研究を押し出すべきであると考え。COIL などの先進的な教育方法も取り入れているということであり、わかりやすく高校生に発信する必要がある。
- ・ 女性職員の比率は目標に達していないものの、30代以下の職員においては50%近くに及んでいるとともに、男性の長期の育休取得者が増加するなど、着実に取り組みが推進されています。

②課題とされた事項

○働き方の多様化を支える環境整備

- ・ 女性教員比率の目標値達成は大いに評価でき、今後も継続しながら、改善を図ってもらいたい。一方女性職員比率、若年層は高いので、どの世代でも男女半々になるよう、ワークライフに合わせた施策や環境の整備が必要(男性職員の環境にも配慮を)。
- ・ 女性教員比率の目標値を達成され、今年度から学長をはじめ要職に女性教員が登用されたことは、学内外に向けて大学が変わろうとしている意思表示として非常にポジティブに捉えている。女性職員の比率に関しては目標値に至らなかったものの、教員の比率を上回る33.2%と年々改善されており高く評価できる。男性育児休暇の取得者も増えている状況を委員会で確認できたが、今後も引き続き制度面を含めた働き方の多様化に期待したい。
また、性別、国籍だけでなく、世代間格差も多様性の重要な視点と考えており、DXやAI社会の進展によって益々複雑化することが予想される。それらの観点も踏まえて、2030年または次期計画のダイバーシティ指標の見直しをされてもいい時期ではないかと考える。
- ・ 目標を定めて取り組みをされている点は評価できる。一方、その目標にまだ到達できていないので今後期待したい。

(5) 経営基盤の構築

①長所・特色とされた事項

○教育の質向上を目指した改革

- ・ 規模の縮小は質の低下に繋がるのではなく、むしろ質の向上に繋がるはずだし、繋げなければならない。2026年度以降の取り組みに期待する。
- ・ 人口減少を背景に厳しい経営環境の中、2026年度の学部学科改組および定員数の2割削減は、質の高い教育が提供されるという意味で今後期待したい。
- ・ 通信教育課程でのオープンバッジ付与などの社会人の学び直しを促進する工夫が行われてお

り、社会人の学びのモチベーションを高めるきっかけにつながるものと評価します。

- ・ 「価値創造を实践する『世界市民』を育む大学」というスローガンのもと、上述の教育、研究、SDGs、ダイバーシティという4つの戦略分野を掲げ、それを推進していく経営基盤強化策として「中長期財政計画」「キャンパス整備」などのプロジェクトに取り組んでいる。

②課題とされた事項

○これまでの取り組みを発展させた募集戦略

- ・ 2026年度から定員削減もあり、学費納入金の減少は避けられない。経営基盤の安定化＝志願者数・入学者数の安定的な確保が必須。ここ3年の入学者数レベルで、と想定してはいけない。受験生動向の毎年変わるのが現状で何が起きるか分からない。
通信教育課程(リカレント教育)の充実、促進を図るなど、学費、寄附金等の減少が避けられない状況下では、増収経営基盤の安定化という点では重要度は高い。
- ・ 今後のリカレント教育について、タスクフォースを立ち上げて調査を開始されたとのことで今後注目したい。また、SGUを掲げる大学のブランディングに向けて、留学生を含むグローバル人材がどこでどのように活躍しているかを可視化することや、海外からの留学生のネットワークづくりの取り組みにも期待したい。学部・通学課程だけでなく通信教育学部の定員充足率が年々減少という状況に関しては、18歳未満の人口減少だけでなく、激化する競争環境や加速度的な時代の変化に対して、より一層スピード感のある対策と中長期の戦略的な改革が必要ではないかと考える。

○新たな収入源の具体的検討

- ・ 入学定員の見直しによるダウンサイジングを進めていくことは、少子が進む中では致し方ないことだが、学費収入の減少をどう補っていくかについては、今後の柱となる取り組みが見えていたとは言いがたく、少々厳しい評価としたい。また、寄付制度において「大学版ふるさと納税」ともいえる返礼品付きの寄付制度がある。大学のオリジナルグッズや大学が立地する八王子市とコラボした名産品を返礼品にすることなどを検討したい。すでに東北大や芝浦工大などが取り組んでおり参考にしてほしい。この取り組みは手間がかかるのは事実だが、寄付を身近なものにするものであることを付け加えておく。
- ・ 産官学連携を進めることで、収入を増やすことも重点項目として取り組むべき課題である。信州大学繊維学部が地元の上田市と2005年から取り組んでいる一般財団法人「浅間リサーチエクステンションセンター」の事例などは参考になろう。大学と企業、自治体をつなぐコーディネーターの役割が重要になってくるが、それぞれが持つシーズを活用できれば、3者がウインウインの関係になることで、新たなイノベーション、産業の創出が生まれるだけでなく、地域の魅力アップにもつながる。多様な学生の確保をするための入試制度にせよ、奨学金の充実を図るにせよ、そのための収入をどう増やすのか。余剰資金の運用をどう進めるかも含め、早期の戦略構築が求められているのではないかと考える。

3. 外部評価委員からの講評

- 大きな輝くすばらしい取り組みがいくつもある中で、それらが学部のカリキュラムにどのように関係し、連携していくのかが見えにくくなっていますので、それらも含めて今後に期待します。
また貴学が AP 事業で開発されたアセスメント科目は多くの学生に影響を及ぼす良い取り組みです。ぜひ次回は報告書にも記載ください。
今後、学修成果の可視化がますます重要になります。IR の結果がどのように構成員に共有され、そして改善提案につながっているかが内部質保証として重要です。その観点を中心にぜひお知らせいただきたく思います。
- 昨年度の評価委員会の結果を踏まえた取り組みをされているところに、改善に向かう強い意思を感じることができ、素晴らしい。
どの分野においても、しっかりと取り組まれていることがわかり、S なのか A なのかを迷ったが、真摯になされている自己点検の結果を尊重し、期待を込めて A とした箇所が多い。
また、地域連携についても、情報を集約され示されたことにも注目したい。多くの地域連携事業がなされているところではあるが、それがカリキュラムの中に取り込まれていき、地域と大学の真ん中に学生が存在するような地域との関係構築に期待したい。
- 平和や人権、気候変動、環境問題、SDGs、国際化、これからの地球や世界では、さらに大事に、深く考えていかねばなりません。これらのテーマは貴学がいち早く取り組んできたパイオニア大学です。どの世代においても、自ら課題を見つけ、自ら解決することが重要視されています。
貴学において、いま何が出来るのか、それに向けて大学全体がどう取り組むのか、社会・地域貢献は出来ているのか。この大学なら、どのような学び、研究、教育、進路が得られるのか、といった点を高校生・保護者・高校教諭・地域社会は知りたがっていますし、大学から発信しなければなりません。積み上げてきた実績と信頼が周知されることで、「選ばれる大学」「開かれた大学」に繋がり、大学全体がより良い方向になると思います。
学生×教員×職員が危機感を持ち、垣根を取り払い、一丸となって同じ景色を見ているか、今後も大いに期待しています。
- 来年度からの学部学科改組、定員数の見直しを控えており創価大学として大きな転換点にありますが、縮小均衡ではなく 2030 年度に向けた新しい出発というポジティブなメッセージを学内外に積極的に発信していただきたいと思います。上記の通りこれまでも質の高い教育と数多くの成果があり、社会に、世界に開かれた大学として特色を訴求し続けていくことが必要だと思います。
また、2030 年のグランドデザインの折り返し地点となり、大きな柱はそのままでも各々の戦略の中身や K P I については必要に応じて見直しをお願いできればと思います。特にこれからは A I による破壊的イノベーションが起こると言われているため、A I とどう向き合っていくかは避けられないテーマになると思います。様々な外部連携を通じた情報収集やコラボレーションから、A I 時代の教育や学びの在り方、求められる人材像などを多角的に議論し、次期計画検討に反映していただきたいです。
不透明かつ不連続な変化の時代だからこそ、建学の精神を核に、人間性を発揮しながら社会をリードする人材を排出する大学として、益々の発展を期待しております。

- ・ 現在、高等教育関係者の中で「2035年の崖」ということが言われるようになってきた。10年後の2035年以降は急激に18歳人口が減る。「まだ10年ある」なのか、「あと10年しかない」のか。いうまでもなく後者である。創価大学は現在、財務基盤もしっかりしており、素晴らしい教育環境が整い、学生の満足度も高い。だが、その魅力の多くは、創立者の魅力や信念、行動力に支えられてきた面があることは否めない。創立者亡き後、高等教育機関としての魅力をどう伝えていくのか。やるべきことは、その一点にかかっているのではないか。

評価委員会で、私はキーワードとして「連携」ということを提示させていただいた。大学間連携、地域連携、高大連携、医工連携、産官学連携…。これからの10年を見通した戦略的な連携を進めることが、創立100年に向けた大きな鍵になるはずだ。

- ・ 18歳人口が減少する中で様々な工夫を行い、優れた学生を育成するための細やかな配慮に満ちた教育を行う大学であることを改めて確認できました。